

會



報

1966年10月

256

日本山岳会

立山の近況

六三 石黒清蔵

立山(剣岳)については御存じの方も多いことだし、従って関心を持たれる方も少なくないと思えます。家醜を申し上げ誠にすみませんが「立山トンネル」を代表とする開発と「遭難防止届出条例」等同業の士から御言葉を頂く機会も多いですから、改めて問題点をとりあげ御批判を仰ぐものであります。

立山について進行中の開発事態は「ある事実」はまさしくあるのだが、その事態をどう解釈するかは各人各様であります。それは神ならぬ身には必ずこうだと断定する訳にはいかぬから悲しいのですが、それでも日がたつに従って明らかになってくることがある。それをなるべく整理して判断の資料を列挙しますと、

一、本シーズンには十三万人または十五万人立山(雄山頂上とは限らぬ)へ登ったそうだが、とに角有史以来の数であり、この後もまだまだ多くなるだろう。

一、観光という登山と我々のいう登山とは飽くまでも異質のものである。観光登山の中から或いは正しい登山も出るかも知れないという希望はまづ泡沫の如きものであろう。但し一般社会常識として山の知識の普及は驚くべきものがある。

一、自然保護と山の開発とは両立出来るということは観念として成立つが実際としてはトコトンまで希望がない。

一、都会生活は必然ともいえる程自然にあこがれるから、山を解放することは政治方向として間違っていない。今や老幼婦女もあこがれの山に登ることが出来て、みんなが喜んでゐるのである。山岳家だけが山を独占するのは僭越至極である、という議論はこれも論理は正しいが、自然の殿堂であつた聖地もゴミの山、剣岳も行列盛り場の海水浴場と同じ平地の延長で、揚句には病氣(ありとあらゆる病氣)事故、想像も出来ぬ遭難の続出で早くも限界説さえある

一、自然美化大行進と銘うって県青協が清掃奉仕を四年やるが関係者は悲鳴をあげ、こんなことは我慢ならぬといっている。

ここで考えさせられることは国費県費をかけて国民の健康、青年の健育に整備を懸命にやるがその動因に「観光」という「アルカロイド」が存する限り俗化はまぬがれない。あわてて今から補完作業をやっても、30年50年は回復しうにもないし、永久にとりかえしのつかぬものが数限りない。諸君国立公園という以上その主管主務者達が「観光課」という名称だけは冠しないようおすすめる。京大四手井教授曰く、自然を破壊する三大元兇は、水力発電、営

林署、観光業者、と挙げられたが国民が祖国を尚ぶと同時に郷土の自然を愛する重要性を弁えざる以上、政治という名の魔物によって

いとも容易に神秘を奪われてしまふのである。許可条件として厳しい枠をはめてあるが何の苦もなくガタガタだ。これからようやく破壊に取りかかる地方の方々に恥じを申上げて敢えて前轍としました序ですが遭難防止でありました。本誌三月号に書いて見ましたが、この遭難というのは我々の考

える遭難とは一寸違うんじゃないか。観光が発展するに伴い、不用意、不適当な登山者が事故を起こすことが多い、それを皆件数に数えるだろう。言葉が悪いが観光がひき起した遭難ともいえる。

真面目な登山を志すならば僥倖で成功することを願うは恥とする。日本の山々には欧州アルプスの三大北壁に匹敵する難場も存在しないから、入念に構えても四晩もビバークする要は一寸なからう。また厳冬積雪期、降りしつせん(旧暦の季語)に遭遇したとして経験上一週間降りつくことはまずない。

雪崩については世界共通の原理がある。

本県として氷と滝、そして岩の組合せによって考えると、剣の大滝・剣川、池の谷、剣本峯の西面あたりが手強いと思う。過去試登も成功されてはおるが一回一回が

試験であることには変りはない。こういうのも遭難防止の枠の中に入るのだろうか。

観光行政が末端では地方政治家の小さい自己本位な見解で展開されると同様に、登山の危険をも観光本位の知見範囲の配慮に基づき運用され、規定されて、それよりも奥の精神面、進取、敢為、滲刺の気象を養成するの大事を忘れ去る危険を恐れてもいる一人であるのである。

目次

立山の近況 石黒清蔵 一
白馬岳初期登山者(Ⅱ) 武田久吉 二
追員の銀光 初見一雄 二
創立60周年記念展 山崎安治 三
八十里越え 中村謙 三
モンテ・オリビア 石原国利 四
図書紹介 四
ガネッシーの蒼い水 五
死はともに登る 五
海外情報 六
サラッポ登頂(現地新聞より) 六
GL第二信 池田錦重 六
ドイツ山岳会訪問 鈴木邦之 六
Canadian Rockies 錦織英夫 六
富士に逝った二人 四谷竜風 七
梓会だより 茶谷東海 七
会費未納について 藤村泰三 八
会務報告 八
支部総会報告(V) 石川・信濃 八
東京支部 八
海外連絡委員会報告 九
会員異動 九

紅葉会予告(静岡支部)

第九回紅葉会の内容については3頁3段末を御覧下さい。尚詳細は静岡支部事務局へ。申込みはお早めに

白馬岳 初期登山者・その外

武田 久吉

白馬岳に關しては、主なものを次に記録する。

この年八月初旬、小説家前田次郎（号曙山）氏と公証人小川正直（号草魚）氏等数名、高山植物採集の目的で、白馬岳登山のため四ツ屋に來たり、第一日に白馬尻の巨岩の蔭に達し、茲で豪雨にあつて敗退した。小川氏は一旦四ツ屋に引き上げて待機し、十二日に至り、二名の入夫（内一人は常吉の長男広太郎）を伴って登山、山頂の破れ小屋に泊り、十五日に下山した。

同年同月十一日、帝大農科大学教授池野成一郎氏登山、山頂に一泊して十二日下山。目的は植物採集にあった。

同年同月、山頂の破れ小屋で、小川正直氏と同宿した学生川島祿郎氏は、十二日、細野の入夫丸山直次郎を案内として、同日遅く山頂を出発し、霧に悩まされながら朱殿坊を左に見て進み、清水小屋に泊る。十三日朝降霜並びに結氷を見る。更に行を続け、九時間を費して柳又の小屋泊り。十四日、豪雨の中を北進して北又の小屋泊り。十五日快晴、午前七時出発、

北又川の支流を遡り、越道峠を越え、十一時小川温泉に到着。一浴して英気を養い、午後三時出発、三時間を費して泊町に達した（『山岳』第二年第一号、明治四十年三月五日発行）。

明治三十八年八月十日、武田久吉、河田黙（後山川黙、共に山岳会の発起人）は、上諏訪の牡丹屋で落合、翌日徒歩塩尻峠を越え塩尻駅で乗車、赤科駅で下車、かねてこの駅当に發送した行李六個の荷を受取り、荷馬車一台に積んで池田町に達して一泊。翌十二日徒歩大町を経て四ツ屋に到着、旅舎八木に投宿して、細野の丸山常吉に連絡し、白馬登山の準備を進めたが、十三、十四の両日は降雨のため出発を延期し、材木を求め、入夫を遣わして流失した二股に架橋せしめた。目的は高山植物採集にあり、山頂に一週日滞在して、付近を隈なく跋涉する予定であった。

十五日快晴に乗じて、細野の入夫六名に、採集用具と炊事用具、食糧一切を負わせて出発、山頂に向った。途中追上沢近くで、入夫の一名は、小川氏について下山中の丸山広太郎と交代、広太郎は再び山頂に引き返すこととなった。夕刻山頂に達し、小屋に入らんとしたが、甚しく破損して、辛うじて仮泊出来る状態であった。

翌十六日幸にも晴天であったので、入夫を督して小屋の改築に当

らしめ、為に一日を費した。翌朝一時頃から降雨。

十九日晴天。早朝結氷さえあった。指呼の間にある鑓ヶ岳へ往復するに、杓子裏を経て鑓裏に下り路なき斜面を登って頂上に達する困難のため全一日を要した。その翌朝七時頃から復も降雨となった十九日山麓を出発した帝大小石川植物園の園丁長内山富次郎氏は甥某と四名の入夫を伴って登山、お花畑付近に露営したが、翌二十日降雨のため、山頂の吾々の小屋に來って宿泊を乞うた。手狭の小屋は超満員となって、横臥することなど到底出来ぬ状態となった。

二十一日も雨に明けたが、午後一時半頃細野から、二名の入夫が村の使者として登り來り、連日の雨天のため稲作に大影響あり、その原因は山上に人がいるが為なれば、即刻下山して信神せよ、もともと東京からの客人は強いて下山に及ばざれば、村民は下山せよ、従わざれば解怠金を徴集するといふ。入夫などは半日を評議に費し結局全員下山に決し、深更一時二十分に至って就寝した。この原因は内山の一行が、入夫を募集するにあたって、過大の賃金によって応募者を誘うなどの不明朗な行動が、村民を刺戟したのだと、下山後に耳にした。

二十二日、私と広太郎と只二人を残して、朝六時十五分、全員下山の途についた。私は村長あてに

一書を認め、これを内山氏に托し二十七日まで滞在する故、入夫三名を山頂の小屋に差立ててくれと頼んだ。一同の退去後は小屋の掃除と整頓に一日は暮れてしまった二十三日は、予期に反して曇天西北の微風は霧を飛ばすという状態であった。正午から広太郎を伴ってネブカビラ付近に採集しただけであった。夕方になって天気回復の徴が見えたので、翌日の期待に勇氣も加わり、夜は採集品の手返しに忙殺され、就寝は午前二時になってしまった。

二十四日果して快晴。午前七時半、広太郎を伴って出発し、旭岳に登り、更に越中側を採集し、路なき斜面や溪流を跋涉し、最後に立壁を経、離山に出て帰着したがその夜から復も雨となった。

二十五日、夜來の雨やまず、折々強い風の吹くという悪い天気であった。嘉吉と作の両名は、雨を冒して、飯米の補給のために登って來てくれた。夜來の雨は東風に乘ったものであったが、正午頃一旦静まって、後には西風になり、強風は雨を飛ばした。（続く）



（カットは佐藤久一朗氏）

追貝の銀光

初見 一雄

むかしといつても昭和の初めごろ、東京南大田山岳部（今の橋大学）に、「おんぼう（隠）」という仇名の御仁がおられた。ついこの間不帰の客となられた磯野君と同時代の人であって、三重県の出身だったと憶えている。この「おんぼう」が足を切ったという、しかも重傷だとの噂は忽ち上高地中に広まった。

昨今とちがつてその頃は、樹木の伐採は自由であった。大口の方は營林署から下掛けをうける必要があったが天幕生活者や小屋借りのいわば一時的な住人には自在に伐りたおし枝を払って薪に造ることが出来た。

可成り太い幹を美事に、自らの膝をもザツザツと切り込んでの深手だといふ。我々はそれを痛むよりもその山刀（鉦）からかききかきと知れぬが、形と切れ味から考へて本文中では山刀の文字を使用したい。の切れ味に感心したのである。

そしてその山刀は恐らく上州ものではあるまいかと思ひ、そして前年か前々年か四月初旬、尾瀬へ行く途中、追貝でその一振りを入手していたので切れ味の好きと使いよさは知っていた銀光の家は追貝の部落のはずれにあ

った。沼田からは乗合馬車で行ったように記憶しているが、沼田寄りの部落のつつきで片品川の橋を渡って直ぐの、確か右側だ。現在は街中の左側に移っている。粗末な荒屋で、金床があるだけの土間が往還より一段低くなっている。居間と名づけるものがあつたかな。仕上ったばかりの山刀が二、三本か来いに引っかけあつたので直ぐ入手出来た。価は割くるみ二円五十銭位だったと思う。

よく切れる山刀と鋸一丁あればデントなどは荷役介だし寝るための窮屈袋も必要なしと何とも生意気で無鉄砲で思い上りのほせていた時期だったせいもあるが、この山刀の入手は非常に嬉しかった。

枯枝一本たりとも燃やすべからず、まして立木など言語断断となつた現在では山刀の入手に骨をおたり、そのきれ味に愛着と非常に関心を持つ人は恐らく一人もいないであろう、例えあつたとしても宝の持ちざれかあたらしく浮かせて使ひものにならなくて仕舞うのがおちだ。年間百万近いとも数十万とも新聞紙上ではやしたてられる程の登山人口の一人一人が山刀を振り廻わしたとあつては山の緑がたちまち赤茶けた地肌を見せるのに数年を要すまい。「枝一本には腕一本」と厳しく取締つた往昔の効果が今日の沼津千本松原の幽遠とも豪壮とも、素晴らしい。營林関係の努力も未だしの感なくもない。

群馬県勢多郡黒根村宇水沼といえど前橋方面から見ても赤城山塊の右裾に当る方角だし沼田からは正に赤城の真うしろになる。ここが銀光の出生の地である。小柄で、筋骨たくましいとはおよそ縁遠い生れつき故、兵隊検査にも事なく落っこち、水飲みすれすれの

五反かそれを越えたとしる十反に及ばない百姓の家、学問に志す夢も持てない、火山灰地にかいて加えて渡良瀬川の鉅毒水との二重苦、二十一才で家を出る、否飛びだしたといった方が當ていよう。

現在の白根温泉の付近に大規模な製材工場が嘗てあつた。消滅した大川材関の経営するところへ夫六百名を擁していたというが、今は十数名の社員に減らしたところ、その飯場へ転がり込んだとてこの細身で大木に向うにはまさしく螳螂の斧、今という配置転換宜しきを得て鍛冶場で働くことになった。

「玉切り」(伐り倒したものを規格の寸法に揃えること)した原木を土場(原木集積場)へ運び出す時になくはならぬ「ガッチャ」(又の名は木マワシ)の鍛造が仕事初めでそれから鉋、片手間に鉋、見よう見まねか、手とり足とりで馴えられたのか、腕の方はみるまに上つていった。

やがて十年近く続いた松下げの樹を始末して造材は終わった。そして二十八才世帯を持つて追員へさがつてきた。追員には星野と呼ぶ姓の家が多い。古い酒屋、新しい運送店もある。だがこの星野銀光は土着の人間ではない。土地の人に聞くと、あれは「旅の人」だといふ、居住五〇年に近づくに馴染みきつた土地にしかくわいわれるのはすべの旧い部落に共通した因習かもしれない。

追員へ住みついてから、しばらくは足尾銅山の仕事にたずさわつたといふ他に甚だしいこと、山刀打ちを生業のみちにするしかあるまい。

注文を請けてから打つ、決して大量生産をしない、慾をかかない、この信条を守つて生きてきた。良いものが出来るとの噂さがこの沼田街道の一部落から月日をふるに従つて

て広まってゆく、噴きだした湧き水が少しづつ地面をしめらしながらその翳りを深かめてゆく、そういつた挨拶だ。一緒に働いていた数多くの「山子」、この人達は季節的な労働者であり、そのため各地を流れ歩き、良い山刀打ちが上州にいるとの口伝えは随分と遠くの地方までさやかれるようになってゆく。

弟子が三人程にふえてきた時、一人の若者がとびこんで来る。はるばる信州から彼の名をしらたててやってくる父の添書をそえて同居を願ひでる。弟子ともつかず、居候ともつかずかれこれ一年以上も面倒をみることになった。一人前の山刀鍛冶になるにはどうして十年以上はかかるという、十三、四年の辛棒のあげ句やと一人前として世間に通ずるようになるが当時の弟子達は誰一人その道に精進しているものはいないという。ただ例外が一つあつた、この無名の青年である。後年日本刀鍛冶として無形文化財保持者の指定をうけた信濃県都賀城町居住の宮入昭平であつて、氏も野鍛冶の息子である。追員時代のことについてはその著書「刀匠一代」に詳しいから省くとして、銀光の名がその方面では群を抜いていたといつてもいい過ぎではあるまい。(次号完)

第九回紅葉会連絡 静岡支部 集合 十一月十二日(土) 九時 静岡駅前北降車口 会費 二二〇〇円(余れば返金) 十二月夕、懇親会、南アルプス・赤石温泉・白樺荘、 十三日、南アルプス展望台の青蘆山の途中まで往復、山頂に池あり。 希望者は南アルプスを序でに案内します。詳細はルーム事務局に御連絡下さい。

◆創立六十周年記念展◆

山崎 安治

日本山岳会創立六十周年記念展が六月十一日から二十二日まで池袋西武百貨店で開かれた。主催日本山岳会、毎日新聞社、後援外務省、厚生省、ネパール王国大使館、国立公園協会、日本自然保護協会、日本山岳協会という大がかりなもので、本会では折井評議員を長とする準備委員を設け、三月九日西武の催事課で最初の打ち合わせ会を開いて準備にたりかかった。展覧会の内容は、会創立以来の六十年の歴史、遭難対策、自然保護、海外登山の四本立てとし、とくに本会で計画中のエベレスト登山について一般への理解を深めるよう考慮され、サブ・タイトルも「第三の極を目ざして」とつけることにした。歴史は山崎、小味、松永、遭難対策は大塚、自然保護は村井、吉阪海外登山は吉沢、松田、竹田、小方の諸氏が中心となって準備を進めた。

日を追うにつれていそがしくなり、てんてこまいとなつたが、とくにパンフレットの制作には頭を悩ました。小生担当の歴史の部では、何といつても創立発起人の七人の写真を集めるのに苦心した。小島、高頭両氏はルムにあらが、武田氏も毎日の写真部ですぐ間にあつたが、あとの四人が大ごとだった。鷹野氏は折井氏、山川氏は望月氏、城氏は藤島敏男氏からそれぞれ手配していただいたが、梅沢氏の写真というので、熱海に電話を入れたら処分されてしまったといわれがっかり。しかし鳥山氏から梅沢氏の御遺族の山口靖子さんに御連絡をいただき、ぎりぎりのところでそろえるという幕もあつた。

万事がこの調子で、六月十日ほとんど徹夜で飾りつけを終え、十一日朝秩

父宮妃殿下をお迎えして開会のはこびに漕ぎつけたときは、やれやれというところだった。

展覧会の内容はパンフレットにくわしく記されている通りだが、中でも武田久吉氏出品の金剛杖、日高信六郎氏出品のモンブラン登山のガイドの証明書(日高氏のモンブラン登山は日本人として最初といわれる)高木菊三郎氏出品の古地図類、ナンドコートで立教大が買ったテント(竹節氏出品)アイゼン、ビッケル、登山靴(堀田氏出品)明治四十三年加賀正太郎氏がユングフラウ登山に用いたストック(握りを開くと腰かけになる。大町博物館出品)木暮理太郎氏愛用のナタ、リュックサック(神谷氏出品)など珍らしいものがあり、また神原氏らの努力でまとめられたエベレストに関する文献など外国でもこれだけのものはちょっととまらないような見ごたえのあるものであつた。

植有恒氏のコーナーには文化功労章をはじめ愛用のパイプ、登山靴、各種バッジ、勲三等旭日中綬章、「山行」などの各著作などで飾られ、人目を引いていた。

皇太子、常陸宮両御夫妻もそれぞれ御来場になり、秩父宮殿下の遺愛の登山用具、御写真などもご覧になつた。会期中、深田、藤田氏の講演があり、また東京支部担当で登山相談所が開設され好評を得た。十二日間の入場総人数は六万六千二百八十一名、一日平均六千二百五十六名であった。御協力いただいた会員各位、並びに西武百貨店、毎日新聞事業部の各位に厚く御礼申し述べたい。

なお記念パンフレットの内容については会報二五三号に掲載されているが、残部がなお若干あるので、希望者は至急申し込まれるようお願いする。



(会員)五十嵐力氏筆

八十里峠越え

中村 謙

長いあいだゆきたいと思っていた八十里峠へ行ってきた。このコースには過去の記録はあるが、最近の記録はほとんどなく、わずかに笠堀から大江を経て、大谷川を御所平まで上って鞍掛峠田代平、木ノ根茶屋跡經由五味沢に向つた長岡の産業道路計画の人々が、この夏の初めに通つたことと、五味沢の浅井氏一行が同じく七月下旬に鞍掛峠あたりまで実地踏査したというくらいのもので、まったく取りつく島もなかった。

八月下旬、長岡ハイキング倶楽部の奥津五郎君たちと合せて八名。東三条駅からバスにて津沢まで、それから石ころの多い街道を炎天にさらされながら吉ヶ平までいく。こゝでむかしの宿橋元屋へいつてしばらく様子をきく。分かったのは、年にいちどはさあつと道刈りをするというくらいなものだった。

の墓を訪ずれ、雨生池への道から右上に登る。その先で左上へ上る道に入らなければならぬが、ちよつと分りにくい。これから九二〇米の堀割までは、ずうっと上りつぱなしである。番屋のあつたらしいところをすぎると、道はほとんど平坦となり次第に登っていく。

われわれは峠の約二〇分下で幕営した。ちよつと平らになっていて小祠があり、むかしお茶屋が何かがあつた跡らしい。

峠からは下りとなるが、水は豊富ながらなかなか険阻なみちである。これをすぎると正面に烏帽子山や守門の袴腰のよく見えるところにつく。なかなか眺めがよい。ブナ沢に降つてカラ堀をすぎると御所平に出た。笠堀からの林道がつうじておつて、路傍の大きなブナの木にはいろいろなキリツケがしてあった。

これからしばらくは道がよく、潤沢を見おろして道が右へ大きく屈曲してからは杖余のスキにおおわれていた。これを登ること約一時間で鞍掛峠に立つ。ここにも堀割で小さな祠が二基、むかしの面影をとどめていた。

鞍掛峠からは袴腰を眺めたり、浅草岳を望んだりして田代平に下り、五味沢への岐路に達する。県界はそのちよつと上のところである。越後の人々はニシンや砂糖を、会津の人々は絹織物を交換した木ノ根茶屋もこの辺にあつたらしい。

木本から草深い道を進むと、松ヶ崎とて小祠があり、姫小松の生い茂つた景勝地があつた。道はこれより山の鼻をめぐる急坂を降り、オソ沢につく。ここは藪とりの小屋があつて、人夫たちは植林のためここに滞在中であつた。われわれも一泊する。

三日目には白沢平を対岸に眺めながら、三本沢をわたる。ここの頃はひろく、いわがたくさん泳いでいた。浅草岳の下り口までこゝまで車道が完成してしまつて、叶津までは夢のようだった。

これで八十里峠越えも目度くおつたわけである。あとはバスを待つて田子倉の展望台までゆき、大鳥行きの舟(こ)につけて赤沢沢出合までゆく。これから六十里越えまでの登りが一苦労だった。ほとんど真直に二三〇〜二四〇米も登つて旧道と合し、赤沢沢本沢の大岩壁の下で幕営した。

(終り)



Monte Olivia (1470 m)

モンテ・オリビア

—フエゴ島—

拝啓 残暑厳しき候、お変わりなくお過ごしのことと存じます。

昨年から今年にかけての東海支部のアンデス遠征の折には何かと協力下さり有難うございました。

さて、東海支部原真君あてて照会のオリビア山の高度と位置についてですが、いま手元に資料がありませんので正確なことはわかりませんが、大体左の如くなります。

1、高度 一、四七〇メートル
2、位置 南緯55度弱、西経68度
位置はウスアイアの東北四キロ位の地点にあります。津田正夫元アルゼンチン大使の本では「オリボス山」と記してありますが、現地の人は「モンテ・オリビア MONTE OLIVIA」と呼んでいます。無雪期には割と登られて

いますが(12・13登)、雪のついた時に登つたのは今回が初めてとかで、廻りの人達がよろこんでくれました。

ルートは西面から入つて北稜の鞍部へ出、ここから頂上に向いました。

頂上に立ったのは3月26日の午後4時半頃で、私と2年前にオリビア山に登つたことのある海兵隊員アマリージョ君の二名です。

同行したもう一人の海兵隊員エンリッケ君は頂上直下のオーバーハングで登頂を断念しました。

帰路は、40メートルのロープ2本を使って連続8ピッチの懸垂下降をして北稜のコルへ戻りました。テントに戻つたのは12時少し前でした。

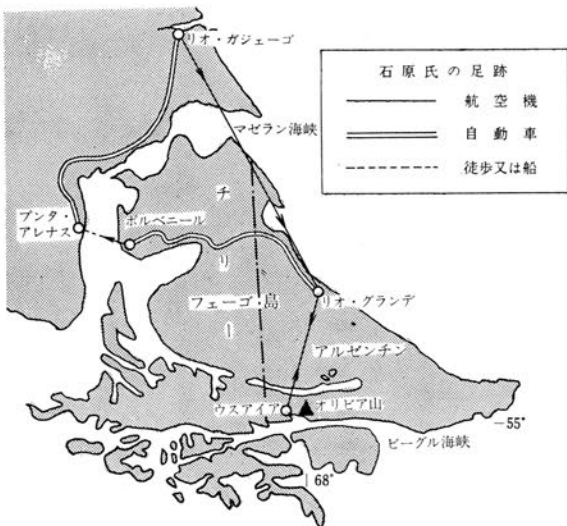
参考までに頂上で回収して来た先登者の写真を同封いたします。

その他カラー写真等必要でしたらお知らせ下さい。後日名古屋からお送りいたします。

では会の皆様によりしくお伝え下さい。敬具

昭和41年
8月21日
福岡市の
寓居にて
石原国利
編者宛て
旅信をお
書き下さ
い。

この頃、日本の山や谷を歩いた会員からの旅信が余り来ません。どしどしお送り下さい。会報は全員のものです。



この頃、日本の山や谷を歩いた会員からの旅信が余り来ません。どしどしお送り下さい。会報は全員のものです。



図書紹介

『ガネッシュの蒼い水』

吉野照道・上田 豊
木村雅昭・島田喜代男

久し振りに街の少しもない、スッ
キリとした、類笑ましい山の本を読ま
せてもらった。

梅棹氏の監修、助言その他があった
とあるが、そのためかどうかわらない
が誤植も殆どないし、これが近頃の
大学生の書いたものかと、今更感心す
る位に、やったことと思ったことが素直
に表現されている。

しかし思えば時代も移り変って来た
ものである。初登頂に成功した学生隊
の四人の年令をみると皆一九四〇年以
後の生れである。私などは四〇年の
開きがある。

隊長の樋口氏もいつているように、
いろいろのことが順々に過去のものに
なっていくが、ヒマラヤ登山の可能性
を一代若くした四人の功績は大きい
と思う。運のよかった点もあろうが、
無事に生命を全うしたのは、彼らの日本
の山を立派にやれたのは、彼らの日本
の山の研鑽もあったが、その山に対
する真摯な、真面目な態度にも負うと
ころが大きかったであろう。それには
矢張り、京大山岳部という自他ともに
許す伝統がものをいっていることも見

逃せない。

この本のサワリは何といっても、上
田君の分担した第二部の『ガネッシュ
登頂』であるが、私は吉野君の書いた
第一部の『ヒマラヤへの道』にも心を
惹かれた。彼が山岳部へ入った経緯や
その後の行き方、京大山岳部という
ものの雰囲気などがよく出てくる。先
輩も後輩も同じ重さの荷物を担いで山へ
行く、これは彼らの訓練方法の一端を
示しているに過ぎないと思うが、流石
に新聞種になる様な学校の山岳部の連
中はどこか違うという感じを深く
した。

第三部の『ダウラギリ山群の旅』を
書いた木村君の文章も面白い。彼は
（私もそうなのだが）山行の合間をぬす
んで学問をちょびりやつた人種らし
いが「いま目の前にある二つの山、ダ
ウラギリとガネッシュは、ぼく自身に
とっては、もうどうでもい山である。
どちらも、すでに人間によって登られ
てしまった山だからだ」というくどり
と「ダウラギリ連峰の峰に登ろうとす
る時、人は二度と、ドボン・コーラに
注目しないう」という二つの事柄
はもう一度考え直してみることがある
のではない。

前にもいったように、いろいろのこ
とが過去のものとなりつつある時に、
可能性のみが取り残されるというこ
とはありえないからである。現に君達も
一つの壁を打破しているではないか。
第四部は島田君の「中部ネパール横
断」ランタン谷からガネツェンボとい
う六八〇〇m峰を二人で登ろうとした
が、軽装備ではどうにもならず引返し
ている。賢明であった。それにしても
こういうところでは略図を入れておい
た方が親切だと思う。

チリメ村で備ったバビールおじさ
んのこと、サマ村の人達はこわいと思
ったら親切だったこと、金のためにだ

けで戦争へかり出されているグルカ兵
について、英国が貧しい人食いものに
している態度を非難したり、その他
いろいろの面に彼なりの検討や批判を
加えていること。なかなか興味深く読
むことが出来る。

話は前に戻るが、ガネツェンの時に
序に登ったテント・ピークについて
は、その翌年初登頂したG・ハウザ
ーから手紙が来て、自分の本が出来上
る前にそれが第二登とわかってえらく
周章でたあつた。何か詳細がわかる
なら送ってくれというので樋口隊長の
お世話で詳報を送った。間違いを未然
に防くことが出来てよかったと思う。
校正洩れと思われるものは五、六つ
あるが、これは一々指摘しないことに
する。但し一〇頁のアフシュナイ
ダーはターが正しい。これは学生諸君
の頭に Erwin Schneider などがあつ
て、シュナイと来ると、あとは皆ター
だと思っていると見え、この間違いは
他の若い人の本にもあつた。ハラーと
一緒に歩き、ネパールにいるらしい
のは Peter Aufschneider であるから
よく覚えておいてもらいたい。
尚最後に、ガネツェンの最高峰への
記事が余りに簡単すぎることを述べて
この読後感を終る。

朝日冒険叢書第十巻
定価三〇〇円、二五二頁
昭和四一年九月十日発行
(吉沢一郎)

『死とともに登る』

ヒーベラー著
吉城 肇訳

この頃は山の本の全集が盛んに発
行されている。私もその片棒を担いで
いるわけだが、よく売れるとみえて発
行元は仲々強気である。

今度二見書房から出た、吉城肇訳、
T・ヒーベラーの『Der Tod klettert

mit』はよく訳してあり、スムーズに
読める。但しはあとというが、この本
の一番大きな悲劇は、巻頭に「日本人
クライマーの悲劇」(特別寄稿と称す)
を加えたことである。折角の面白い物
語り集をこれで品位のないものにし
てしまった。惜しいと思う。アイガー・
グレッツチャー駅から汽車に乗ってなど
という妙なことは別としても、この章
の二分分は、それがたとえ事実であ
ったとしても、人名まであげて兎や角
いふのは少し大人数ではないか。

こんなことは巻末に七p位の活字で序
に付けておく程度の方が格好がよい。
それにしても私も時々やりはするが)
余り余計なことはいわない方が良さそ
うである。

いずれにしてもこの本は、下らないス
リラー小説なんか読むより余程面白
い。面白いばかりでなく仲々に教訓的
であり、多くの示唆を含んでいる。

唯私の希望としては、アイガー周辺
の略図なんかがあったらと思うし、又
人名や地名が全部片仮名だけなのは、
読者層を考へてのことであろうが、や
はり横文字を入れておいた方が親切だ
と思う。

この本では教えられることも多いが
登攀者がえらい短い時間で完登した場
合、その裏に、他人のつくった足場や
固定網、ピトンなどを盲く利用してい
る点などが見逃してはならないところ
である。

同じ意味から完登者の中にも、本来
ならその資格のなかったものが、何か
の偶然が幸いして登れたという実例の
あることが示されている。

細かい点で気のついたところを述べ
てみよう。fast senkrechte Wand
steileを、殆んど垂直の岩棚」と訳し
ているが、垂直では棚といえない。壁
と直訳した方がわかりがよい(59頁)
アイガー北壁地質概念(76頁)のと

ろへはやはり原本にある地質図を入れ
るべきと思う。

Walter というのは皆、ヴォルター
と書いているが、ドイツではそう発音
しているのかどうか。
118頁の真中にある「私の杞憂はむ
なしく」が日本語らしくないの、原
本をみたらそれに該当する文字はな
かった。

何一〇メートル(100頁)は新しい
書き方らしいが、百を使った方が素直
である。三、四百メートルというとき
はどうするか。

これは文句ではないが、人間である
以上仕方がないとしても、アイガー北
壁に挑むほどの者であつて、ビッケル
やアイゼン、時には食糧までも落して
しまうようなクライマーがいるとは全
く呆れてものがない。

ティトルスというのが二度出て来る
が余り聞いたことのない山だと思い原
文をみたらやはり Titlis とある。そ
れとも向うではこれをルスと読んでい
るのか。(187頁)

英国人の Don Williams をウィリ
アンとしてあるのが、189〜207頁まで
に九カ所ある。それでもあとではや
つと気がついたと見え283頁からはウィ
ランズと直つていた。前をどうして直
さなかったか。

リッペ(Rippe)を、肋骨のように
凸凹したところ、と説明(201頁)し
てあるが、これは急な細い支稜とした
方がわかりよい。

ウォーカー・ブファイラーというの
がところどころ(210頁他)に出てく
るが、これは普通、バットレスといわ
れている(そうになっているところもあ
る)ので、それに統一すべきだ。

244頁第一行目の「いわゆる心理
的エクスタシーが現象される、も難し
い。eine physische Ekstase の二番
い。(以下二頁4段へ)

海外情報



ボリビア山岳会 (1961) I.Y.

サラッポ登頂

——日大山の子会——

ペルー・アンデスのワイワシニ山群へ何処にも連絡せずに入った。(日本山岳協会や日本山岳会のあることも全然知らない連中らしい。知っていれば何処かに多少の連絡があった筈である) 七月六日午後〇時三十分、中坪、武者の両名がサラッポ(六四三三)に登頂。CI建設に一日を要した。

七月二日CII、四日には四〇〇mの氷壁の頂に登って引返し、五日は休養六日はCII四時発、一〇時後線、頂上前記。三年來の夢が実現したとあるからには相当研究し、海外の山の事情も知っているものと思う。

六時二〇分、CII帰着。BC七月八日集合。

今年のワイワシニにはドイツ、オーストラリア、英国、米国、メキシコなどが入っており賑やかであったという。彼らの報告によると、二十一才の二人が六〇〇m以上に登れたことに非常に満足を感じたとある。

それから一四日にBCを離れ、次の目標である、コルディエラ・コチャバタに向かったというが、その後の消息は不明。遭難したというニュースもない

ので無事リマについたことと思う。
現地新聞より (吉沢)

☆グリーンランド便り☆

第二信 池田 錦重

六月十八日午後三時半、デンマークの砕氷船 Nella Dan (3,200 Ton) でコペンハーゲンを出帆しました。

この船は昨年、南極観測に行くオーストラリア隊をその基地まで送り、帰ってきたばかりの船で、今年初めて東グリーンランドに渡る第一便です。船の後尾にはルフト・ヴァンツェのヘリコプターを積んだ物々しい船です。僕らは乗船するやいなや、全員甲板に集められ避難訓練をやらされた次第です。船のグリーンランド到着予定は早くても七日目あたりで、誰れもグリーンランド海流のバック・アイスのコンディションいかにでわからないといったあたりさまでした。

船内は我々のほか、デンマーク本土に勉強に行っていたエスキモーの子供達や、グリーンランドに住んでいるデンマーク人の子供達も夏休で親元に戻るため、多勢乗り込んでいるほか、既知に知っているとは思いますが、Gl. De France の北方で山登りをするスイス隊の隊員四名が乗りこんでおります。彼らは全員八名ですが、既に他の四名は一ヶ月前に飛行機でアンマグサリックに飛び、周辺の部落で、大を七十頭程買い集め、Kunguit まで調教しているそうです。彼らの中には一九六三年の隊員が三名も加わった強力な遠征隊です。

グリーンランドまでの航海は連日海が荒れフェローアイランドやアイスランドはとうとう見えなくなり毎日20度から30度のローリングがあり、全員船酔いに苦しみました。そして六月二十二日夕刻、やっと北方グリーンランドや北極から流れだしたバックアイス

で詰ったグリーンランド海流のふちに着きました。最初の頃は簡単に大きな浮氷をさけながら入っていきましたが、しかし今年は昨年より一ヶ月早いだけに浮氷群はぎっしりと詰り、船の入りこむ余地がないほどで船は全然進みません。天気はあいかわらず悪く、それでも夜の十二時頃よりいづらかよくなり、薄黒い底の平らな雲が低くたれこめた下に、黄金色の落日を背に黒々とグリーンランド沿岸の山々が白一色の雲海のようなバックアイスの水平線上に初めて見えてきました。船の周囲には大きな氷山が点々とその青黒い姿をよたよた見えています。しかしこの寒々とした厳しい光景も船から眺めると実に楽しく、実に見事で見あきることがありません。

六月二十三日朝夕より霧が深くなったため、船は天気まらというところになりました。そして霧が薄くなると薄い浮氷を求めて進みます。天気はグリーンランド内陸の方を見るといつも快晴ですばらしい天気ですが、海の方は常にどんよりした雲でおわれ海岸線を境いよりした変化の激しいのはおどろくばかりです。

六月二十四日はアンマグサリックの目の前にきましたが、平年より多い浮氷群のためと天気が悪いので、アンマグサリック湾に入ったのは結局六月二十七日になりました。アンマグサリックの崖壁には、昨年お世話になったオナビア船長夫婦や、ソーレンセン夫婦が迎えにきていました。今日のアンマグサリックは町中が、今年初めて食糧および燃料の補給船を迎えるため仕事がお休みとなり、昼間は船員、船客とその家族が、航海の無事を祈るため、教会に集っていききました。我々は今晚は船に泊まることにし、夜はソーレンセン宅にまねかれまし

た。ここで新たにグリーンランド・スイスの南端にオランダ隊が入ることをききました。また我々のいくフオーレル峰には、スエーデン、ノルウェー合同隊が七八名のメンバーで我々と同じルートを犬なしで一ヶ月ほどおそく向うそうです。彼らの中にはヒマラヤの経験者が含まれているとのことでした。

ここから我々はクンミュートに向うわけですが船の都合で二三日は、ここに滞在することになりそうです。アンマグサリック・フォルドは今年是非常に浮氷が多く、時間がかかるのと、昨年のように簡単に上陸できるかどうかは、現地にいった見なければ何ともいえません。とにかく今年はグリーンランド・オリンピックとよべるくらい一ヶ所に各国の遠征隊が集中しております。そして今年のグリーンランドは雪が多く、海やフォルドには浮氷が多く船の航海は困難ですが、内陸に入れば楽だと思われまます。しかしヒドンクレバスには昨年以上に気をつけたいと思っています。六月二十八日、今日は船からおり昨年天幕を張ったアンマグサリックの町の丘の上に天幕を張りました。付近にはオランダの隊と、スイス隊の一部の者がやはり天幕をはりクンミュートにいく船をまつております。しかしヘリコプターのパイロットの話や、昨年世話になった新聞記者の話ではアンマグサリック・フォルドは水でつまり、まだ二三日は出発できないのではないかと聞いています。とにかく今年は今時期も少し早いので、あまりあせらずじくじくとかまえて山登りをしてきたかと思つてます。隊員一同も大変に元気です。天気もよいので、明日も船がでないなら皆で周辺の岩山にトレッキングに行こうと話しております。

(六月二十八日、アンマグサリックにて——松田苑)

ドイツ山岳会訪問

海外連絡委員会ドイツ担当委員 鈴木 邦之

先日 München のドイツ山岳会 (Deutscher Alpenverein) 山岳協会 (Günther Hauser氏を訪問致しました。先入観というものは恐ろしいもので、どこかの山の一家だろ位に思っていたのですが、何とドイツ博物館の近くの森に開かれた川の中の島に堂々と建つての白亜のビル全部がドイツ山岳会のルーム(?)でした。入口の左側が受付で、その受付だけでもわが山岳会のルームより大きく、三人の女子がタイプをたたいておりました。すぐ社内電話(?)で来訪が知らされ、受付の案内でハウザー氏の部屋(彼個人の部屋)に通されました。その部屋もわがルームの三分の二程あって、ま

ず山のことより部屋のことでドギモを抜かれてしまいました。早速冷いものを出されましたが、まず部屋の敷を聞きましたところ(大変変な質問でしたが)二十以上あるそうで最近このビルは新築されたそうです。ドイツ山岳会は二九〇の支部を有し、会員数実に二四、〇〇〇人、会費はA会員(普通会員)で、年額一三〇ドイツ・マルク(一一、七〇〇円)、B会員はその半額で学生やA会員の家族などがこれに当り、その外に Jung Gruppe (年少会員) があるそうです。会費は全部確実に徴収されるそうで、これならばこの位のビルは建つなと思つてました。ハウザー氏は未だ若くしうとした如く何とも山男といった感じで、昨年日本から幾つもの遠征隊がどこどこへ行つてどこを登ったとか、詳しく数字をあげて話してこれ、こちらが参つてしまいました。たまたま吉沢一郎さんや竹田吉文さんのお名前が出て来たりして

大変懐しく思われました。特に吉沢さんや竹田さんのアンデス遠征の記録が参考になったと感謝しております。それにつけても日本からの情報をもっと詳しく知りたいというお声がありました。ヒマラヤにしろ南米にしろ日本は驚く程積極的で心から感心している様子でした。そして何とかこれらの情報を入手したいときりぎりすしております。

「山岳」の巻末の英文ではものたりない。何らかの方法で独文とはいわなくても少なくとも英文のものが、日本から欲しいと何度もいつておりました。情報交換については、ドイツ側も出来るだけのことはするから、日本山岳会でももっと積極的に考えて欲しいとのことでした。それから日本山岳会と岳連の関係がよく分らないといっておりまして、大体の歴史と現状を話しておきました。

話の途中で、ブルガリア山岳会(Union Bulgare de Tourisme)のヴィクトール・ヴランスキ教授が現れました。たまたま今夏ブルガリアのリラで開かれる国際アルピニスト集会(Rassemblement international sur les methodes l'enseignement)について打合わせに見えられたのですが日本からも是非出席して欲しいといっております。(編者注参照)

今度は二人共何となく日本の山に登りたいと旅費の計算をしてみ、一度相互に交換登山隊を送らないかと、いつていました。

山の話は何を話していても楽しいものです。あつというまに時間がきてしまいましたが、ガイドの試験の話など聞きたいことも種々あったのですが、またの機会にゆずり、山岳会を辞しました。

会の皆様宜しくお伝え下さい。

(七月六日付 松田寛)

今夏八月六日・十七日ブルガリアの

ロシアで開催された国際アルピニスト集会(シヤモニーの集合同様約三十ヶ国が参加)の通知は本会に届いておりましたが、主催がブルガリア観光連盟なので、ツリストの大会と考えて会員に通知しませんでした。後で判明しましたところ Union Bulgare de Tourisme はブルガリアを代表する山岳会でした。(御詫言わねばならぬ)

カナディアン・ロッキーマウンテン

カナディアン・ロッキーマウンテン

学生部アラスカ・カナダ登山隊長 錦織英夫

すでに秋風がたつようになり、八月二日シアトルに戻りました。往復九、〇〇〇マイル近い距離を走り山と旅を充分楽しんで帰りました。

七月二日アラスカ・ハイウェイを南下、真直ぐロッキーマウンテンを目指し、四日早急バス(三、九五四m、カナダロッキーマウンテン)に向い、南西面のルートから八日頂上に立ちました。評

富士に逝った二人

四谷 竜

去る五月の連休に今年もまた多くの遭難事故が起った。その事故の中で富士山の例の大沢で五月四日箕口信三(五六)と斎藤清太郎さん(五八)の二氏がザイルにつながり、死体となって発見されたことが諸君はどう受けとら感じられたことだろう。世の思

上った一発屋共と違つて至極真面目な情熱そのものの登山者だった二人。二人をよく知っている私は全く、いすべもないかなしみである。上手の手から水が漏れ、猿も木から落ちる。全日空の遭難、B.O.A.C.の遭難、カナダ機の遭難、技術の向上と共に来る慣

判通りの仲々困難な山です。天候も悪いようで、年に二・三パーティーが登るくらいで、それに二・三パーティーが二週間程前にも大阪のパーティーが成功している模様です。冬期の登攀がようやくこの春行なわれたとのこと。この山はアルパータと並びガイド料が一番高く、一〇〇ドルだそう。この後は基地をアサカ氷河に移し、コロンビア、トウィンズ、スタフイルドの三山をねらいましたが、相

僧の悪天で三日間停滞、いったん下山。一隊はすぐアイズフィールドに戻り、他の一隊はそのまま再びジャスパーに戻り、今度はエディスキヤベル(三、三六三m)をねらい、ようやく晴天をつかまえ、コロンビア(三、七四七m)およびエディスキヤベル(東稜)に成功しました。もうすっかり新雪をかぶり、エディスキヤベルは冬の岩登りの最初でした。コロンビアの方は今年の最初のパーティーだったようです。アプローチも短かく、ハイウェイ沿いに素晴らしい山が並んでいます。登山者をほとんど見かけません。森林と

その上にひろがるメドウの美しさはロッキーマウンテンのものです。どの山も一日一、五〇〇m以上のロングランで爽快なクライミングを楽しめます。こんな山を持ちながらもカナダ人は山登りにはあまり興味がないらしく、アメリカからやってくる連中が活躍しているようです。一、〇〇〇mをゆうに超えるような壁はいくらでもありますが、あまり快適とはいえないようです。その点バグビーは花崗岩の爽快な岩登りの道のようなので、クライマーの数は全く別なもので、フィールドは十分残されています。日本あたりから、じゃんじゃんやってきて登ってもいい山だと思えます。

アッシュニボーンにも似た山があったのですが、すでに食糧も底をつき、ロッキーマウンテンを去りました。この間三ヶ月、ずきと車で移動したわけですが、学生同志、実に愉快な道中でした。アラスカの山はまだまだエクスペディションといった感じのものが、ロッキーマウンテンは気軽にクライミングを楽しめます。

帰路も往き同様、三隊に別かれ、九月、十月にかけて帰国の予定です。長いこと御心配をおかけしましたが、全日程を無事終えることができました。この後は残る連中がレーニアに登る予定です。J.A.C.の皆様によくお伝え下さい。

(八月二十八日付シアトルにて松田寛)

『梓会だより』

茶谷 東海

去る九月四日(日)第二回山行と第五回懇親会を開催した。今年は日高信六郎氏と防衛大学校ワンダーフォーゲル部員(学生)が参加した。

一、日ノ出、御岳山行
○九二〇立川発、五日市迄電車、上養沢迄バス、養沢鐘乳洞を見て一三〇〇日ノ出上着。東雲小屋で夕食、小屋を出て間もなく激しい夕立。御岳の土産物店で田部重治名誉会長などと合流し雨の中を頂上の神社に向う。雨の石段二八五は少々こたえる。一四三〇正式参拝。梓会の発展を祈る祝詞があった。三時間半の山行を無事終了した。参加者二十一名中七十才以上は日高さんら三名、六十才以上は小生ら三名、女性三名。

御岳神社神官橋本秀敏氏宅で開催。記念撮影。会友田部先生の「昔は青梅から歩いて御岳に登り大岳より三頭へ出たものだ」との追憶談から始まり一年振りに静かに心を通う声で未知のエピソードがいろいろ披露された。次いで日高先生は(一)先年中房温泉の古い宿帳に大正五年海軍理学校生徒の名があったのを見つけて印象に残っている。(二)義兄に当る軍艦日進機関分隊長高橋大機関士(機関大尉)が秘蔵の弾痕生しい伝声管(艦橋より機関室へのボイスチューブ)の一部を山梨勝之進大尉の勲功で記念三笠へ寄付したことを、その後もなくアルゼンチンのフロンディシ大統領が三笠を訪問した際山梨さんがそれを見せたら大変感慨深げだった由などを話された。そのあと小生より大統領はそれとき「日進は春日と共にアルゼンチンが伊太利に注文して建造中だったもので日露の風雲急となるに及んで日本の懇望によりこの二隻を譲渡したのである。日本が日本海海戦で大捷したのはアルゼンチンのおかげである」と豪語した旨付言した。このあと会食に移りこの会の特色たる全員自己紹介を行ない、一七四〇閉会、雨の中をケーブルバス、電車の遅延で三十分を過ぎながら家路を辿った。

去る九月四日(日)第二回山行と第五回懇親会を開催した。今年は日高信六郎氏と防衛大学校ワンダーフォーゲル部員(学生)が参加した。



支部総会報告 (V)

石川支部

六月一日付石川支部長より昭和四十一年度の役員を左記の通りきめた旨

富士清掃登山運動のこと

(自然保護担当理事)

ここ数年「学生山岳愛好清富会」という名の下に、一橋大学山岳部、一橋大学ワンゲル、東京女子大山岳部、東京女子大ワンゲル、東京外国語大学山岳部では富士山の清掃を行なっている。今年も八月十六日入山し十九日迄の間、吉田口登山道を中心として行ない、主として缶、ビン類を五合目迄下ろし紙くずはその場で焼却し、約十屯のゴミを清掃した由である。

「自然の美しさを守ろう」というキャンペーンをまき起こして、この清掃運動は強力に推進されているが、この運動が全国の山々にまで拡がることを念じて止まない次第であります。

お知らせ

会員山本良三氏より、中外製薬製、ルサン・リベント(防虫クリム)一、〇〇〇本の寄贈を得ました。希望者は本会事務所にありますので御申出下さい。

ルム日誌(四一年八月)

3日(水) 東京支部委員会
11日(水) 図書委員会
17日(水) 三水会
24日(金) 海外連絡委員会
29日(水) 婦人部委員会
土曜会 6日、13日、20日

報告があった。

記

顧問、池田知幸、河本俊彦、磯野三郎
支部長 小林雄次郎
副支部長 亀田与三三
支部委員 増江俊三、灘地信夫、東一郎、木本 芳、石田 健、木村桂、酒井治夫

監事 橋 礼吉、真田昌孝
信濃支部
支部員数 正会員 一二五名
準会員 二〇名
団体加盟数 八団体

昭和四十一年度役員
支部長 高山忠四郎
(代理、塚本茂樹)

常任委員 金子誠吾、山浦源太郎、中野和郎、西 牧康、小里頼忠、二木計臣、堀内章雄、小林忠治、高橋貞利、市原貞夫、井口謙司、赤羽孝一郎、塚本茂樹

編集委員 小林俊樹、青柳安照、早乙女綾次
委員 三代沢本寿、百瀬寿雄、百瀬一茂、浅輪幸久、宮沢 功、増沢和正、田中弘美、保科文人、信大代表

年間行事予定
五月 夏山登山技術講習会
六月 第二回ウェストン祭
七月 支部二〇周年記念講演と映画の会

八月 夏山合宿
十月 支部懇親山行
十一月 富士初冬訓練
一月 新年総会
二月 スキーツアー
三月 冬山合宿

支部例会は隔月各地区にて開催する
東京支部会務報告 (以上)

九月七日(水) 役員会

出席者 石原・野田・小味・西丸・須田・倉知・大西・堀川・細井・鈴木和・鈴木邦・武田・村井田・関口・松永(網蔵)

1. 報告事項
(イ)支部会費の納入状況について
(ロ)婦人部有志のニュージランド登山隊のメンバー変更について

2. 議事
(イ)支部創立二十周年記念行事に関する件
(ii)記念品の作成頒布について
(iii)記念山行について

十一月三日(木) 奥武蔵大霧山、会費五〇〇円。(松永)

六月定例理事・評議員会
(六月二日、午後七時)
本議事録が洩れているのに気がつきましたからここに追録しておきます

▽出席者 三田副会長、理事・加藤、村木、松田、飯野、宮下、川崎、広谷山口、竹内、倉知、竹田、長尾、小方、住吉、評議員・佐藤、深田、折井、吉沢、島田、藤井、中屋、村井、石原、東京支部沼倉委員、委任・渡辺副会長、平山理事、望月、津田評議員。

▽議事
(1)役員会の運営方法および方針：加藤 これまでの理事会ではたまっている議案の検討だけに終始してしまっているように、登山の根本問題を検討するというような意味で、自由討議を主体とするようにしたい。

そこで本年から小さな問題は常務理事会で検討したい旨、加藤理事から提案があり、評議員各位の賛同を得た。

(2)実行予算検討の件……………加藤 本件については五月二十六日の臨時理事会でも検討したが、まだ各担当理事

より、資料が集っていないので、常務理事会で処理することにする。

(3)支部長会議開催の件
現在松方会長が渡米中で、六月二日まで不在なので、その帰国後に開催したい。本件については次回の役員会にはかりたい。

(4)創立六〇周年記念展覧会開催の件
(詳細は、会報二五六号三頁参照) 折井

「山日記」寄贈のお願い
「山日記」欠号につき、会報二五四号にてお願いいたしましたところ、会員小島幸太郎氏より、一九三三年版、一九三九年版の二冊の御寄贈を戴きました。厚く御礼申し上げます。

残りの左記三冊につきまして、重ねて御願い申し上げます。

第二輯 一九三一年版
第五輯 一九三四年版
第六輯 一九三五年版 (以上)

(5)会費徴収の件……………飯野 会員の動静を十分に把握して会費の徴収率をあげるようにしたい。

なお、四月理事、評議員会の席上、四〇年度会費の未納者には会報を送ることにしたが、四〇年度未納者には送ることに訂正した。(即ち三九年度以前は発送停止)

(6)職員交替の件……………加藤 六月末日をもって吉野界氏が退職されることになったので、後任として飯野理事から推薦のあった川瀬伊三郎氏を後任の書記として採用することにした。本件、松方会長には採用者は未定であるということ、諒承は得ているとの説明があり、本件承認す。なおそれに伴い、若村事務員も従来パート・タイムであったが、フル・タ

イムに切替えない。

沼倉氏の情報により、外苑コーポの一階および二階に空室があり、一室(一七坪)を三五〇一三六〇円で買取れるから、この際買取ってはどうかとの話があるので、検討中である旨説明あり。会長不在の折でもあるので、常務理事会に検討を一任する。

(8)支部報告
(一)東京支部……………沼倉 都岳連加盟の件につき説明あり。それによると、東京支部より常任理事として、野田三郎氏委嘱理事として広谷一郎氏、評議員として沼倉寛二郎氏が役員として選任された。この他に副会長として加藤泰安氏、参与として辰沼、大塚、松田の三氏が選ばれているので、諒承されたい旨の要望があった。

(二)関西支部……………住吉 種々の事情により現在の支部ルムは移転せざるを得なくなったので、取あえずスポーツマン・クラブに机を置かせてもらうことにしている。

(9)その他
(一)アルバイン・レジスター編集の件 従来、アルバイン・レジスター編集委員は図書委員会の中におかれていたが、今年度より図書委員会の業務から離れたので、アルバイン・レジスター編集委員会には、山崎安治氏を依頼することに決定。

(二)調査研究委員会の委員に吉沢一郎氏を選任する

(三)地方支部行事の件
(1)信濃支部、ウェストン祭 六月一六日
加藤、飯野理事参加の予定
六月五日
渡辺副会長出席の予定
六月二八日
宮城支部、夏山の夕、講師派遣
六月二八日
成川隆顕氏に依頼

(4) 白石町南蔵王連峰山開き
六月二六日

(5) 東海支部総会
六月二二日

加藤理事出席予定
(以上)

九月理事・評議員会

(一日・ルーム)

- ▽出席者、三田副会長、理事・加藤、辰沼、村木、大塚、松田、飯野、宮下川崎、広谷、平山、住吉、倉知、小方山口、竹田、評議員・深田、吉沢、石原、折井、藤井、佐藤、村井(以下委任) 松方会長、渡辺副会長、長尾理事、評議員・島田、望月、中屋、高山、津田、堀田、松本監事

▽議事

(1) 支部長会議報告……………松田

(2) 実行予算案検討の件……………飯野

経理担当理事作成の実行予算案について検討す。即ち収入は大体予算の通りであるが、支出は予算に比して九十万円増加し、このまゝに推移すれば、来年度では繰越金を全部使いきることになり早急に抜本的対策を講ずる要があるとの説明があった。即ち増加の九十万円の内容はいずれも理由のある止むを得ざるものであり、収入の増加を計るより他に方法がない。収入については取り敢えず会費の徴収を徹底して行うこと、山日記等の出版物の早期発行による売上げの増収、山岳、会報の広告料を積極的に集めることに努力し、その他賛助会員を増やすこと、財務委員会を設置して臨時収入を計ることも真剣に考えねばならないことを確認の上、実行予算について承認することにした。

(3) 各担当理事報告

① 医療……………長尾

② 富士山頂診療所の件……………長尾

七月二十二日〜八月一日の期間開設し受診総数七〇名、勤務医延入

員二名、尚勤務医に対する日当、交通費として四〇、〇〇〇円を支出することを諒承する。

(b) 夏山診療所助成金の件

厚生省国立公園協会より昭和四十一年度分として二五〇、〇〇〇円が交付されることになったが、医療連絡会加盟十二校で二〇、〇〇〇円ずつ、富士山頂診療所に一〇、〇〇〇円を分配する予定である。

③ 庶務……………松田

昭和四十一年除籍者のリストを検討、関係者の協力を要望。

宛名カード・ケース、新着図書ケ

1 スの購入の報告があった。

④ 海外連絡……………松田

(海外連絡委員会報告参照)

⑤ ルーム……………宮下

(1) ルーム倉庫を竹田理事の協力で改

造した。

(2) ルームに冷蔵庫を備えたが、これ

は寄付金により購入するもので、

協力を願ひたい。

(3) 佐藤久一朗氏にお願いして本会の

ペナント一〇〇枚製作した。希望

の会員には一枚五〇〇円で頒布す

ることとする。

(4) ルーム当番について、

東京支部委員より当番は一人では

いでは足りないかとの意見もでいて

るが、もう少しばらばら現状通りでい

ことを確認する。

⑥ 集金……………川崎

九月五日に台湾訪日登山団一行の

歓迎会を松屋サロンで行なう予定。

司会者は折井評議員と決定。

⑦ 経理……………飯野

吉野昇氏退職慰労金の募金額は五

六、〇〇〇〇円に達した。

⑧ 学生部……………村木

学生部のアラスカ・カナダ登山隊

は所期の目的を達して帰国の途にい

ている(会報本号七頁参照)

⑨ 山岳編集……………村木

望月氏から校正を引継いだ、エディターを引継いだ訳ではないとの説明があったが、アシスタント・エディターということで編集業務一切を引継いでもらうことを諒承した。

⑨ 会報……………小方

二五四号(八月号)目下組版中である。

⑩ 自然保護……………村井

上高地ロープウェイの問題は当初

信州側は反対の態度をとっていたが

最近では賛成しているものもある様

なので樂觀を許さない。東京でも反対

の氣勢を上げて欲しい旨要望があっ

た。本件は担当の辰沼理事が、日高

名誉会員と連絡をとって具体的な対

策を講ずることとする。

⑪ 避難対策……………辰沼

十一月末に三越で、避難対策につ

いてのシンボジウムを行なうべく、

目下原案をねらっている。本件予算

の承認と、大塚理事の協力を得たい旨

要望あり、本件、承認す。

⑫ 海外登山……………大塚

(1) 台湾登山の件……………大塚

長らくはつきりしなかった台湾登

山の許可問題も訪日登山団の来日を

機に、受入側の状況を確認して検討

した結果、この度推薦された日本山

協会一本にしほること結論に達し

たので、手続きについてのルールの

原案を作成し、目下先方に手渡して

検討して貰っている。九月五日の歓

迎会の当日には、一応の返事が貰え

ることになっているが、正式には、

台北へ帰ってから常務委員会を開い

て決定されることになっている。

(2) スポーツ外貨の件……………村木

八月末で締切ったところ、一ツ橋

大、東京農工大、神奈川山岳連、千葉

山岳連の四隊の申込があった。九月十

五日に海外登山審議委員会を開いて

決定することになっている。

① 東京支部……………広谷

(1) 支部創立二十周年記念行事の件

(八頁、東京支部会報報告参照)

(2) ニージーランド登山の件……………村木

世話人広谷、小味、松永委員を中

心に資金面の準備を進めているので

協力を願ひたい旨要望があった

② 石川支部……………村木

支部長交替の件。この度支部長小

林雄次郎、副支部長亀田与三氏に

代り、前支部長磯野三郎氏は支部顧

問になった旨連絡あり、本件諒承す

(5) 台湾訪日登山団の件……………折井

八月九日十員富士山に登頂。

更に十一人の中七人は一四二〇日

上高地・西穂へ検へ、その後関西へ

行き、大塚、静岡を経て八月末帰京。

一日は山岳協会に挨拶、九月五日

本会の歓迎会の後、九月六日 JAL

にて帰国の予定である。

② 自然保護……………藤井

北海道自然保護協会の理事長井出

貴夫氏(本会会員)が上京され、冬

季オリエンタルの会場恵庭岳の自然

保護運動に関連し、日本人の自然保

護についての認識のないことをあげ

恵庭は仕方がないが、今後このとも

あてて、JAC 当りを取り上げて

考えて欲しい旨要望して帰られた旨

報告があった。

以上

常務理事会

日時 九月九日(金) 六時三十分

場所 本会ルーム

出席者 辰沼、村木、大塚、松田、

川崎、竹田

▽議事

(1) 永年会員、終身会員の会費納入につ

いて、

両会員とも満〇十年に達した年の

会費を納入してのち、その資格を有

することになることを確認、従って

今年十二月の年次晩餐会で永年会員

として表彰される予定の会員も昭和

四十四年度の会費は納入する義務の

あることを確認する。

(2) 名義変更の件……………村木

会員番号四八〇九小石川高校山岳

部の代表、馬場勇象氏より、同部は

休部を命ぜられていたので、個人会員に名義を変更したいとの申出があったので検討した結果、本来ならば名義変更は認めない方針であるが、休部という特殊事情があるので特例として認めることにする。

(3) 芝浦工大台湾登山隊に推薦状発行の件……………本年十一月迄は現行通りという

ことで承認する。

(4) 「山岳」広告の件……………村木

広告料の値上げを決め、広告予定

先と紹介者につき検討する。近日中

に担当竹田理事より依頼状の発送が

行なわれるが、今年は特に各支部に

も協力を依頼することになる。

(5) 実行予算の検討の件……………村木

九月一日の理事、評議員会で予算

案は承認されたが、不足する九〇万

円の対策について検討した。その結

果支出面では、交通費の節約、会報

の送料を三種郵便の許可をとること

により削減をはかる努力を試みるこ

と、収入面では、会費の積極的徴収

新入会員の増加、山日記、山岳の早

期刊行、広告の積極的勧誘等につき

理事会として努力することを確認。

(6) その他……………村木

(1) 海外連絡委員、袋一平氏が九月十

七日発でソ連、グルジア共和国にで

かけるので、会のペナントを託する

こととする。

東京支部会務報告

十月五日(水)役員会

出席者 石原、沼倉、関口、鈴木郭、

富田、大西、武田、野田、広谷、堀

川、西丸、松永、(安彦、折井、松

田)

1 報告事項……………村木

(1) 都岳連リーダー会参加の件(広谷

報告)(広谷)

(2) ニージーランド女子登山隊経過

報告(広谷)

2 議事……………村木

(1) スキー講習会の件……………村木



海外連絡

委員会報告

▽日時 八月十九日(金) 六時三〇分
▽場所 本会ルーム
▽出席者 吉沢、牧野、神原、袋、鈴木、関口、倉知、松田各委員
▽議事

(1) 海外山岳会とのジャーナル交換の件
最近新たに、シエラ・クラブからも会報が届き、有名な会報を出している会の会報はスイス山岳会の Die Alpen を除き大体揃う様になった。但し年報の場合はともかく月報の場合欠号がかなりあるので、これを揃えるが大変である。

(2) 最近の海外情報交換の件

① フランス

フランス山岳会の紹介で来日した Anne Marie Masset 嬢は川森左智子さんにお世話を願ったが、八月五日〜六日婦人部の浜中康栄、岡部浩子嬢が同行して無事富士山頂を往復してこられた由。

② ニュージーランド

ノーマン・ハーデイ氏が今年五月遭難救助に赴き、雪崩のため重傷を負ったとのニュースが入った。御見舞状を出すことにする。

③ ルーマニア

日高名誉会員からの連絡で Ing. Walter Kargel より同氏の著書 Himalaya (ブルガリア語版) と交換に「山岳」を送って欲しいとの依頼があったので早速送ることにする

④ アルゼンチン

ブエノスアイレス在住の北大 O B 増山直義氏より、同国にある二つの Federation についての説明を送つ

てきたので会報にて報告することにする。会報二五七号参照)

⑤ ソ連

グルジア共和国との交換登山の概要と、現在グルジアにいる横浜山岳会の隊について説明。

⑥ 台湾

来日した訪日登山団員を案内して目下折井委員が槍ヶ岳へかけている。来る九月五日に歓迎会を行なう予定。

⑦ スイス、オーストリア

展招理事が、この度両国の山岳会を訪門し、会の規約、遭難対策についての資料を持ちかえられた。これら資料は取り敢えず吉沢委員が内容をみて、必要事項を会報にのせることにする

⑧ ドイツ

ドイツ山岳会を訪問した様子につき説明(会報二五六号六頁参照)

⑨ イタリア

フォスコ・マライニ氏は来春来日の予定である。

⑩ 韓国

ソウル特別市山岳連盟より金楨姿(本会々員)氏を隊長とする訪日登山隊の招請状交付方要請があったが、同連盟は出来れば東京都山岳連盟より招請を希望している(両国主都山岳連盟の交換登山として)ので、本会としてもその線で協力することにし、本件は東京都山岳連盟海外委員の遠藤、堀川、広谷委員に依頼すみである。(松田)

どこでも歩こう 走ろう体力づくり!!

歩走運動機

ウォーキラン

A型…団体用
B型…家庭用

本機は、自力で動く道路を軽便小型に機能化したもので、自分の歩走度に応じて、自由に速度が出ます。スピード・筋力・持久力・体形・モーション・等のトレーニングに最適です。

一仕様一

1. 速度計(毎分、毎時)
2. 距離計(小計、合計)
3. ブレーキ調節
4. 斜面角度調節
5. 移動用車輪付

PATENT

当会東京支部、進藤波男(1863番)を中心とする日本人間工学会員・運動生理学者の研究者グループ・大三エンジニアリングの結晶作品

使用例

- 歩走トレーニング全般
- 重装備登行
- スキーに於ける、ターンニーション
- 体力テスト・動的健康診断
- 美容運動・ウォーキングダンス
- 身障者のリハビリテーション
- 屋内体操場等に

東京都北区上十条5の36

伸映精機 K K

電話 (911) 8 8 2 4
(911) 3 7 3 2

『会費未納について』

藤村泰三

会報七月号に本会の会費未納が多い、次号から未納者のリストを逐次公表するとありましたが、このことについて私はつぎのように提案いたします。会費納入はつい忘れ勝ちなものです。私もその一人です。そういう方も多いと存じます。そこで会費未納者に対しては「あなたは会費切れです」の印刷物(小さなカードのようなものでよい)をつくって会報の中にちょいとさみこんでおく。また会費未納の原因の一つに送金の面倒さがあります。その対策として振替送金用紙を一枚入れておくことです。

他の同人雑誌なども殆んどこの形式をとっており、会費切れと振替送金用紙で成功しております。ぜひ実行してほしいものです。それから会費の金額なども時に会報に掲載してほしい。ことも送金したら「値上げしている」追送してほしい」と返事を頂いた。ハガキを印刷しているところをみると他にもこんな方が多いのではありませんか。

最後に未納リストの公表はもっての外です。まさか税金の滞納ではあるまいし名誉にも関することです。それよりも会費を納め易いよう工夫するのがよいと存じます。

あなたのネガから、大型パネル(枠)張り

お部屋の飾りに! 贈りものに!

山岳写真を

(本多善博)

本多写真工房

名古屋市南区柴田西町 1-16 電話(611) 7047

あなたのネガから、明快なコントラスト適切なトリミング(構図)で、大型・美麗・パネル張り写真を製作いたします。ネガと返送料 150 円同封でご注文下されば到着後 5 日以内に製作発送いたします。代金は着品後 10 日以内に送金下されば結構です。なお代金前払いの方は返送料は弊社で負担いたします。また、特にトリミングをご希望の方はその旨明示して下さい。但しネガ不調のため作品にご満足頂けないと思われる場合には、ネガ、代金、返送料ともそのまま直ちに返送申し上げます。

- | | | |
|------------|-------|---------|
| ■全紙半切 | パネル張り | ¥ 1,000 |
| ■全紙 | " | ¥ 1,500 |
| ■(新聞1ページ大) | " | ¥ 1,500 |
| ■全紙2倍 | " | ¥ 4,000 |

上記以外のサイズ、または同時に多数ご注文の際は、ご照会下されば別にお見積り申し上げます。

(五頁下段より)

目に、心理という意味があるのか。これは、没我状態になる、とすれば問題はない。

スペインの山名などの中で不適当な発音がある。人名のラバーダが殆んどタとなっている(28頁)これでいいの。

誰の本でもそうだが、この本もうしろの方へ行くに従って校正洩れが目立つて多くなる。やはり草臥れてくるのである。同情はする。

以上のようなことをいろいろいつて来たが、結論としては、読めば得るところのある本であるということはいえる。大いに読んで、アイガーの北壁でばかりでなく、山というものに慎重な恐れを抱くようになるべきであろう。

昭和41・8・5発行・東京神田二見書房・定価五八〇円

(吉沢一郎)

◇さあいよいよ追いつて来た。カンフルが利いて来たという訳。原稿もドシンドシお送り下さい。遠慮はいりません。

但し余り編集者泣かせのは後述になります。◇今月は8頁の予定が又12頁の号は横文字が沢山入りました。これは外国へのPRと想って我慢して下さい。◇近頃会員係の原稿が大変奇麗になった。チャンと17字にわかりやすい字で書いてある。これではなくては協力とはいえない。

(吉沢一郎)

昭和四十一年十月十日発行

東京都渋谷区神宮前

三ノ三 外苑コーポ内

法人 日本山岳会

発行所 吉沢一郎

編集代表 吉沢一郎

頒価五十円

電話(03)六五〇一七五

振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂

☆会報製本御引受け☆

製本代 (201号~250号) 金 600 円也
送 料 別 受 け

中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道端 2-15、電話 (943) 0311 (代表)
大阪店・都島区相生町 7、電話 (352) 3491 (代表)
名古屋店・昭和区雪見町 1-15、電話 (731) 7331 (代表)
工場：大阪工場(堺市)、東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい

一九六七年版「山日記」

(内容予告)

山の生態学 今西 錦司
登山の基礎 山崎 安治
登山と気象 宮内 駿一
山の装備 松田 雄一
山の医学 住吉 仙也
遭難対策 大塚 博美
山の植物 山下 一夫

その他、最新のデータによる山小屋一覽、登山行程表等の記事、資料を掲載します。
発売予定は、一月末頃となります。ご期待下さい。